

最後の最後まで粘り抜くことのできる強い生徒の育成について (校内模試を中心に据えた学校の活性化とその活用、学問の愉しみについて考える)

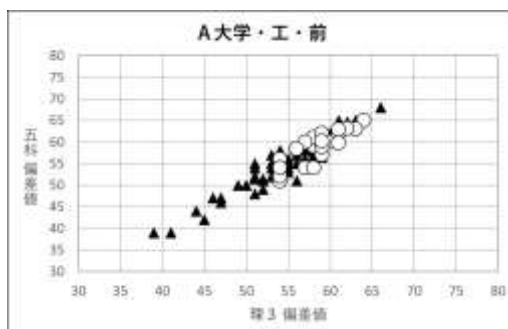
香川県立丸亀高等学校
教諭 久保 博信

1 はじめに

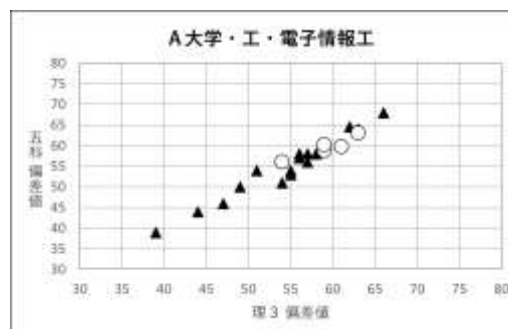
丸亀高校は努力することを惜しまない礼儀正しい生徒と、生徒に対する愛情にあふれた、仕事熱心で誇り高い教員から構成される学校である。筆者は令和5年度4月に異動してきた際、教員の生徒への熱意の強さ、寸暇を惜しまず仕事に取り組む姿に圧倒された。ただ、校内模試の結果と大学入試合否結果との関連を示すデータがかなり見にくく、結果を活用しきれていない様子で、校内模試の結果より業者模試の判定結果や業者の作る大学別の冠模試の結果を主に活用して、受験校を考えさせるようになっていた。このもったいない状況の原因は校内模試の結果から合否との距離をはかる、つまり校内の「物差し」になる大学ごとの「校内模試偏差値と合否結果の相関表」、および自己の力の伸長が一目でわかる詳しい個人票がないことであると感じた。校内模試はもちろん校内の教員が作成するものである。ここには、教える者の演習量と学力が反映し、作問、採点（この採点力も学校の財産である）、返却時での簡単な個人面談を通して、教員の授業力、人間力が問題作成ごとに向上していく仕掛けが潜んでいる。校内模試は紛れもなく進学校の生命線であるとの考えのもと、それをクローズアップさせることに注力した。

2 実践の内容・方法

- (1) まず過去の進学データ（2014年度に在籍した3年生および補習科生から始まる11年分：約1万4000件）から合否データを参照したところ、校内偏差値と合否結果がきれいに相関していることがわかった。そこで、本校生のよく進学する文系44大学、理系56大学の学部ごとに以下の（図1）のような相関表を作成し、自分のことと理解させるために、製本、冊子にして、令和6年度より1年生から補習科生までの全校生徒と全教職員に配付した。さらに、内部資料として、三者面談等で活用することのできる、（図2）のような学部だけでなく学科ごとの相関表（文系26学科、理系68学科）も追加として作成した。



（図1）相関表（学部ごと）



（図2）相関表（学科ごと）

- (2) また、校内模試の個人票も従来の数字だけの個票から、教科ごとにその実力の変遷が分かるグラフデータを載せたものに変更した。工夫した点は、各教科の成績を1つのグラフの中に埋め込むのではなく、小さいグラフを20枚、生徒個人票の1紙面にまとめたことである。また、見やすくするためカラープリンターで印刷し、期末懇談時に生徒、保護者に配付した。ここではその一部を以下の(図3)に記す。



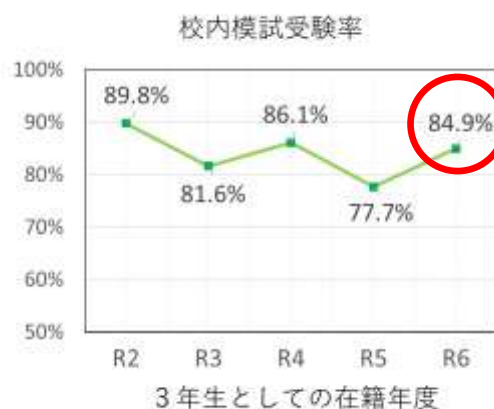
(図3) 校内模試の個人票(一部)

さらに、試験実施後、各教科に作問の意図と講評を公表してもらうことで、生徒の意欲に火をつけるよう工夫した。また、期末懇談には副担任も同席するようにして、関わる多くの教員で生徒を励ました。

- (3) 校内模試を作成することは、作問者の知的好奇心から始まるものであるが、それを生徒に体感させる仕掛けが校内にはなかった。そこで、普段の授業ではなかなか踏み込めない、難関大学入試の背景について、学問の面白さ、奥深さ、多様な捉え方などを示し、生徒と自由に語りあう「学問を愉しむ会」を令和6年度に創設した。これは、2学期からの土曜日、ほぼ月1回のペースで運営した。土曜日に開く講座になるため、まず筆者が理系化学を担当することを宣言し、その後、協力いただける先生方を募ることで3年生と補習科生を対象に数学(文系、理系)、理系化学を設定することができた。生徒には午前中連続3時間の時間割を提示し1科目だけの選択としたが、どちらも受けたいとの要望が強く、結局午前中3時間、午後3時間で1科目ずつ実施することにした。(なお、令和7年度からは理系物理、英語にも広がり、土曜日に加えて平日の放課後にも実施することができている。)工夫した点は、あくまで進路指導部の自主企画とし、生徒にも教員にも自由な雰囲気を確保したことである。これは「自由さ」こそが本校生徒の知的好奇心をくすぐるキーであると確信してのことである。

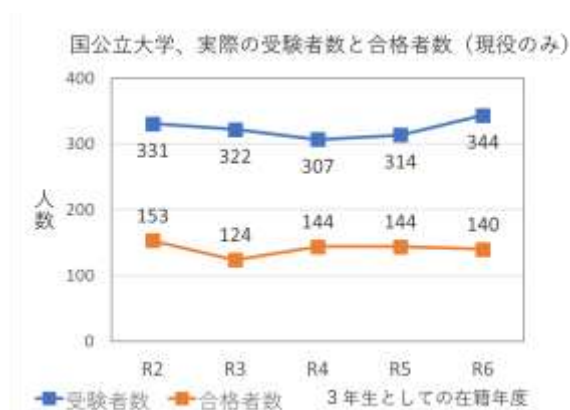
3 実践の成果

- (1) 「校内模試偏差値と合否結果の相関表」を配付し、校内模試の有用性を生徒に広く説いた結果(図4)のように令和6年度はコロナ禍(令和2年3月～令和5年4月頃)を通して、77.7%まで落ち込んでいた、第4回校内模試(10月末実施、校内模試としてのその年度の最終回)の受験率が、少し増加に転じた。第4回の受験率は秋から冬にかけての伸びと関係するため、注視している。なお、嬉しいことに令和7年度は94.3%にまで上昇した。



(図4) 最終回校内模試の受験率

- (2) 保護者を交えた面談でも「校内模試偏差値と合否結果の相関表」を利用することで保護者にも進路指導の中身が見え、納得も得られたのか、国公立の目標大学に出願し「最後まで」取り組む生徒が(図5)のように増えた。なお、グラフ中の実際の受験者数とは国公立大学前期、中期、後期試験に「最後の最後まで粘り抜いて受験した」現役生徒の実数であり出願のみは除外している。また、参考までに難関大学(国立難関11大学と国公立大学医学部医学科)に同様に出願した現役生徒の実数を(図6)に示す。



(図5) 国公立大学への受験者数の推移



(図6) 難関大学への受験者数の推移

- (3) 「学問を愉しむ会」の参加者は各回とも40名を超え、多いときは50名近くにまでなった。生徒は想定以上に知的好奇心に富んでおり、それを満たすことはできたように感じる。また、若手教員の聴講もあり、教員間で知的な好奇心を共有することで、若手を刺激できたことは意外な副産物であった。
- (4) 現役の時は、残念ながら結果が得られず、もう一度本校でやり直したいと考える、補習科への出願者数と実際の入科者数が顕著に増えた(図7)。昨今の経済事情もあると考えられるが、本校を信頼していない場合は出願しないわけであるから、本校の取り組みを生徒が信頼している証であると考えられる。(なお、出願者数と入科者数の差は本校では補習科への出願が国公立大学後期試験の合格発表前であるため、後期試験で合格した場合、その大学に進学するからである。)



(図7) 補習科への出願者数の推移

4 普及させたい取組と期待される効果

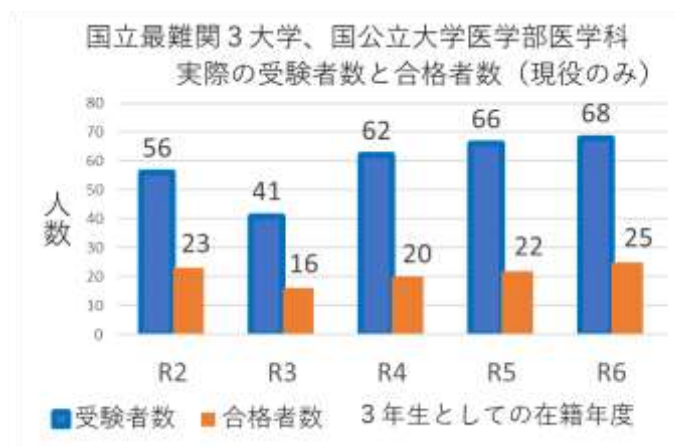
今回の取り組みを通して、校内模試を学校を中心に据え、生徒の知的好奇心をくすぐり、結果の見える化とその活用方法を提供すると、生徒の目の色は変わることがわかった。また、「学問を愉しむ会」を創設することで、教員の姿勢を示し、生徒と知的に交流をするとき、生徒は愉しみながら取り組み始めることもわかった。全体を通して、若者の知への憧れは確かなものであり、そこに向かってアプローチする大切さがわかった。どの学校でも「校内模試偏差値と合否結果の相関表」は作りうると考えるが、それを単なる「合否結果を占うためのもの」として使うと効果は限定的なものになると考える。重視すべきは、作問者の知的好奇心を豊かに保ち、それを「生徒の力に合わせて提示する」ことが、最後の最後まで粘り抜くことのできる強い姿勢を生徒に与えると考える。そしてそれがあれば、生徒を「自分のことを自分で律し、自分で決定できる、真に自立した人」に育てる効果があると考ええる。

5 課題及び今後の取組の方向

教員に求められることは、学問への飽くなき興味とそれを愉しむ姿勢、そして演習量である。ここは絶対に手を抜いてはならない。そして、その姿勢から生まれる豊かな発想と刺激を生徒へ提示することは、未来を生きる生徒に対する最大の贈り物になる。学問は、点数に怯えながらするものでは決してなく、愉しみながらするものである。この理想を追い続けることが学校の使命であると信じたい。しかし、最近の教員業務は多忙を極めていくことも事実である。いかにして教員の仕事を減らし、知的好奇心を保てるようにするか、これを課題として、より効果的な行事を考え、企画し、関係各位と協議し続けたい。

本稿3ページ目(図6)に示すように、本校現役生徒の難関大学への実際の受験者数は上昇を続けている。この流れを維持し、本校の使命である知的好奇心に富む生徒を育て続けたい。

最後に、過去5年間の国立最難関3大学と国公立大学医学部医学科を、実際に受験した現役生徒数とその合格者数の変遷を(図8)に示す。これを見てもわかるが、合格率から見た場合、まだまだ道半ばである。ただ、「最後の最後まで、一生懸命に粘り抜く生徒」を増やし続ける指導、また「目標に挑戦したいと思いつけるたくましい生徒」を育てていく指導には、我々自身が、世代を超えた教員間の知的な交流を続け、学問を愉しみながら、挑戦し続けていくことが必要で、結果的に、その姿勢が生徒に勇気を与える指導になると考える。そして、その積み重ねこそが、学校全体を活性化し、明日の躍進に繋がっていくと考える。引き続き研究し続けていきたい。



(図8) 国立最難関3大学他への受験者数の推移